

バングラデシュへの医療援助 10 年間の歩み —「保健文化賞」受賞と天皇皇后両陛下への拝謁—

岡本内科こどもクリニック

畿央大学客員教授

岡本新悟

はじめに

私が奈良県立医科大学在職中に指導していたバングラデシュからの留学生の故郷に医療援助として病院を建設して10年が経過した。無医村に新しくできた病院は開設当初から患者であふれ返った。しかし世界でも最貧国であるバングラデシュの患者の多くは医療費が払えず、必要な薬を病院側が負担することも少なくなかった。そのため病院の経済的自立の策としてマンゴー園の建設や、働く場をセットとしたホームの建設を行い、この10年でガジプール地区1の病院に発展してきた。これもこの支援事業に賛同して協力を頂いた日本の方々からの大きな援助によるもので、土地の人々は日本からの援助に心から感謝している。この度この事業の10年間の歩みについて協力を頂いた方々へのお礼も兼ねてレザ医師と私の共著で「Your Dream is My Dream」という本を出版した。また令和元年12月この発展途上国への医療援助を評価して頂き「保健文化賞」を受賞し、皇居において天皇皇后両陛下に拝謁する栄誉に浴することになり併せて報告させて頂くことにした。

I. バングラデシュへの医療支援を始めたいきさつ

15年前私が県立医大で奉職中、バングラデシュから一人の青年医師 Dr. Mohammad Selim Reza を留学生として受け入れ指導をおこなっていた。彼はバングラデシュ1の名門大学であるチッタゴン大学医学部を奨学生でそれもトップの成績で卒業したエ

リートであった。私も多くの医師を指導してきたが彼ほど聡明で人格的にも立派な青年医師を見たことが無かった。幸い彼の英語のレベルは私と同程度で意思疎通には不自由することはなく次第に彼の人となりを理解することができ、彼も私に絶大な信頼を寄せてくれるようになった。彼は私の指導に十分応える熱心な学徒で、学会発表や何篇もの論文を書き奈良県立医科大学の内分泌学の Fellowship の資格を与えることができた（写真 1）。



写真 1：レザ医師に内分泌学の Fellowship を授与

また彼は日本で留学生活を送るなかで多くの方々にお世話になったことについて今回出版した本に特別にページを割いて感謝の意を表している。ふり返って今なお鮮明に思い出す事であるが、彼が4年間の留学生活を終えて帰国するにあたり、東京での学会のあと彼を「はとバス」に乗せて東京見物をさせていた時の話である。浅草寺の境内で簡単な昼食をとっている時、急に彼が神妙な面持ちで「先生お願いがあるのですが」と私を見上げて祈るような目付きで訴えるのであった。「実は故郷の村に帰って貧しい人のための診療所を建てたいのですが、資金を援助して頂けませんか」と言われたのである。彼は県立医大の Fellowship を得た

あとアラブの国で高額の給与で勤務医として招聘されていると聞いていた。それが急遽故郷の無医村で診療したいとのことで、彼の思いの急変に驚いた。しかし4年間彼を指導する中で彼の人柄を十分理解しており、彼が今まで全て奨学金でカレッジから大学まで卒業してきた事から、自分を育ててくれた故郷の人々への感謝と恩義を感じていることが容易に想像できた。その時どの程度の金額が必要なのか解らなかったが、彼の帰国と同じ年に私も大学を退職することになっており、退職金が援助として役立てられると考え一瞬妻の顔が脳裏に浮かんだが「**I will support your dream.**」と約束した。そして彼が帰国する前日に私の部屋に挨拶に来て、「先生どうかここに立ってください、私の国で最も尊敬する人に対する感謝の気持ちです」といって私の足元にぬかずき両手で靴を抱えて額を靴に当てて「先生長い間ありがとうございました」と日本語のあとイスラムのお祈りの言葉で私の幸せを祈ってくれた。その瞬間私の心に「彼は私を絶対裏切ったりはしない、私も彼を最愛の愛弟子としてサポートしてやろう」という心になった。以来私と彼とは親子関係を超える絶大なる師弟関係となったのである。そして彼の帰国に際し彼に「山本周五郎の赤髭診療譚」の話をして「君にバングラデシュの赤髭先生」というニックネームを与える、そして「**Your Dream is My Dream**」と言って、彼の村に診療所を建てる費用を私の退職金全額を基金として使えるように約束して彼を見送った。

Ⅱ．レザ医師の帰国から病院建設まで

彼は2008年12月に帰国し、彼とはメールで連絡を取りながら病院建設の計画を練った。私は「岡本マンゴー基金」という海外医療援助基金を立ち上げ、そこに私の大学の退職金を寄付して病院建設の資金とした。日本の円とバングラデシュのタカの貨幣価値は5倍以上であるため私の退職金は用地の購入と最初の診療所の建設には十分であった。そして1年間の準備期間を経て診

療所が完成しレザ医師と薬剤師、ナース、検査技師を含めた5名のスタッフで診療を開始することになった。私はバングラデシュでも日本の診療所のように患者さんが来てくれれば診療所は経済的に成り立って行くものと思っていた。しかし日本の様な保険医療システムが有るわけではなく、世界でも最貧国であるバングラデシュの人々にとって日々の生活が精いっぱい医療に出費するということ自体ある意味贅沢なことなのである。これではせっかく手がけた診療所と職員の生活が維持できないという危機感があった。そのため私のアイディアで診療所の近くに新たに2ヘクタールの土地を購入し、マンゴーの木を植えそのマンゴーの実からの収入で貧しい人の医療費に充てるマンゴー園「Okamoto Mango Garden」の建設を提案した。レザ医師も私の計画に驚いたようで農園の購入からマンゴーの苗木の植林そしてブロック塀の建設まで私の計画通りに現地で指示してくれた。このマンゴー園のアイディアは中国の故事にある奇譚的な医師の話から来ている。その医師は医療費が払えない患者には診療所の庭に杏の苗を植えることで無償で治療を行い、後に大きな杏の林になったことからそのような医師を「杏林」と称するということからきている（私は一時期杏林大学医学部でお世話になったことがあり、その故事が脳裏にあった）。私はその故事を参考にマンゴーの苗を多くの支援者に1本1万円で買って頂き、その寄付金で診療所の設備と薬局を維持することに使わせて頂いた。その後毎年マンゴーの実から30万円程の収入が得られるようになっており、そのお金を身寄りのない寡婦の薬代として提供している。マンゴーの木は毎年大きくなって多くのマンゴーの実が得られるようになってきており貧しい人の支援に十分役立っている（写真2）。



写真 2：マンゴー園のゲートとネームプレートを付けたマンゴーの樹

さらに今まで 300 人近い方々からのマンゴー基金への寄付があり、身寄りのない寡婦たちのホームの建設にも役立っている。このホームは「Mango Home」と命名し、身寄りのない寡婦が身を寄せるホームだけでなく、1 階に作業施設を設置して手作業の仕事で収入を得るようにも配慮している。そして病院と薬局とマンゴー園さらにマンゴーホームを併せて「Okamoto Medical Center」として現在以前の診療所を改装し、4 階建の新たな病院に向けて建設中である。そして令和元年 6 月基礎工事と一階のエントランスと診療施設ができ（写真 3）さらに 2 階には産科病棟から手術室への総合病院への発展を考えている。ただ病院からの収入だけでは病院の維持と職員の給与で精一杯の状態であり、経済的に自立できる発展途上国の医療施設の維持とレベルアップをどうするか現在もレザ医師と模索中である。



写真 3：Okamoto Medical Center のエントランスと診察を待つ患者さん達

Ⅲ. Okamoto Medical Center の今後の計画

以前私と家内が現地を訪れ診療を行った経験から、発展途上国の医療事情は我が国の様な先進国の医療とはいろいろな面で想像を絶する違いがあることを実感している。日本の医療施設は独立採算でも施設運営ができる程豊であり、むしろビジネスという一面で発展を後押ししている観がある。しかし発展途上国ではまず医療保険システムや国から補助がなく医療費や薬代は全て自費である。そのため貧しい人々にとって病院は手の届かない別世界なのである。まして国家そのものが政情不安を抱えており医療に十分な予算を組めないのが実情である。この様な発展途上国で個人の医療機関が経済的に成り立っていくこと自体不可能であると言うのが実情である。そのためには医療施設を維持するための経済的基盤を持たなければ維持できない。その一つの方法として私が考えだしたのが「マンゴー園」であり「マンゴーホーム」である。バングラデシュでの医療援助で私が学んだ事は、「医療費が払えない人々に僅かなりとも収入の場を与え、卑屈な思いをせずに医療が受けられるようにする方法を講ずること」が発展途上国における医療支援にとって重要なことであることが分かった。すなわち患者さんと家族に働く場を与えずかなりとも収入を得て治療費を支払うという策である。バングラデシュは北海道の広さに日本をはるかに超える一億六千万人の人口がある貧しい国である、一方東南アジア諸国の中でも著しい経済発展を遂げている国である。特に農業と織物産業が盛んで、私のアイディアであるマンゴーなどの果樹栽培や手作業による織物工房とのセットで医療施設を維持する方法こそが他の発展途上国にも可能な方法であると考えている。このシステムについてはノーベル平和賞を受賞したバングラデシュのユヌス学長との会談でも高く評価していただいた。そしてなんとか「経済的に自立できる医療施設」をと考えてきたわれわれの Okamoto Medical Center はやっとその基盤ができたというところである。そして4階建の総合

病院が完成するまでにはまだまだ日本からの資金援助が必要であるが、レザ医師を始めスタッフも少ない給与で精一杯働いている（写真：4）。そして私の夢は Medical Center の最上階にナースの教育と日本からの研修医を受け入れる研修センター「Medical Education Center」を設けて発展途上国の医療を体験できる病院にしたいと考えている。



写真 4：レザ医師（中央）と 6 人のスタッフ

いずれこの病院が経済的に自立できた暁には奈良県立医科大学付属の海外研修施設として大学に寄付し、さらに発展させて頂ければと考えている。レザ医師も奈良県立医科大学の研究生であったことで、彼もぜひ日本からの研修生を受け入れプライマリケアの指導をして恩返しができればと同じ夢を描いている。そして私のアイディアである「医療施設と地場産業とをセットとした支援システム：Mango Project」により発展途上国の無医村をなくす活動が世界に広がってくれることを願っている。

IV. 「保健文化賞」受賞と天皇皇后両陛下への拝謁

このバングラデシュへの国際医療援助に対してこの度「第 7 1

回保健文化賞」を受賞し、令和元年12月18日受賞式後に皇居において天皇皇后両陛下に拝謁する光栄に浴することができた。今回の受賞は団体受賞10団体と私を含む個人受賞5名であった。拝謁式は赤坂御所の「檜の間」で執り行われ、皆が整列して緊張しながら両陛下のお出ましを待った。部屋の奥の扉が開いて侍従の案内で天皇陛下と皇后様がゆっくりとした足取りで入って来られた。そして天皇陛下の穏やかなお顔と皇后さまの優しい笑顔で張りつめた空気が瞬時にしてなごみ部屋全体が温かい雰囲気包まれた。そして天皇陛下が労をねぎらうお言葉を話された後、皇后陛下とお二人で受賞者一人ひとりの前に進まれ、各自の仕事の内容をお聞きになった。両陛下が私の前まで進んで来られた時にはさすがに緊張を覚えたがバングラデシュの医療事情と現在の **Okamoto Medical Center** の発展、そして多くの方々からの援助で発展しておりますと紹介した。陛下はうなずきながら興味深くお聞きくださり、最後に雅子皇后さまから「これからも頑張ってください」と温かいお言葉を頂いた。30分程の両陛下への拝謁は別世界に居るような感じで家内とともに何か満ち足りた気持ちで皇居を後にした（写真5）。



写真5：皇居にて天皇皇后両陛下に拝謁（令和元年12月18日）

おわりに

この度バングラデシュへの医療支援10年間の歩みについて
レザ医師と私の共著で

“Your Dream is My Dream”

Ten year walk of Okamoto Medical Center

と題してレザ医師の生い立ちからバングラデシュの
医療事情、そして Okamoto Medical Center の建設から発展まで
を1冊の本として出版することになった（写真6）。ご希望があ
れば贈呈させていただく事にしており、奈良県医師会に連絡頂け
ればお送りさせて頂くことにしている。

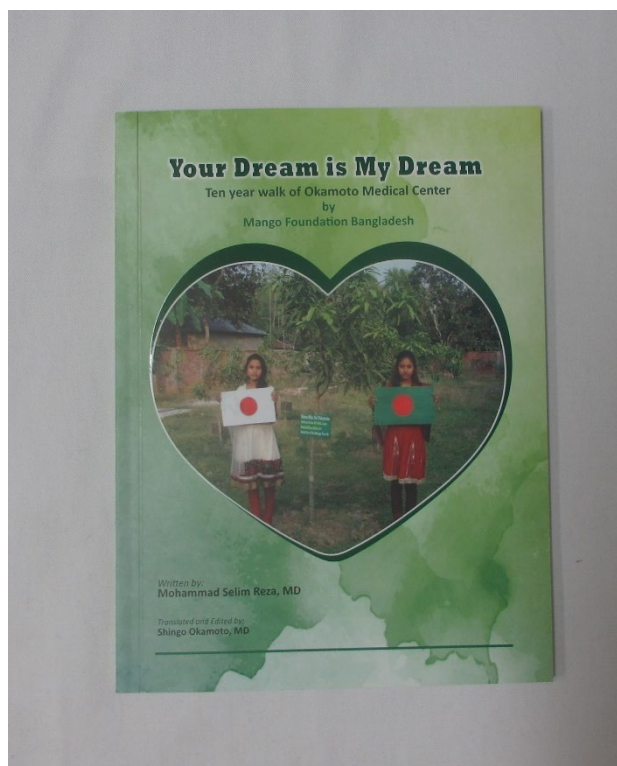


写真6：Okamoto Medical Center 10年間の歩み

英文（日本語訳付）

付記：

この度の受賞に京都大学 iPS 細胞研究所の山中伸弥教授から
「このたびの保健文化賞のご受賞、誠におめでとうございます。」

岡本先生の長きにわたるご努力とご功績が評価されたものと、確信しております。」と心温まるお祝いの言葉を頂戴したことをここに紹介させていただきます。（2020/1/15）